

第一次大戦前のヨーロッパ体制は、英仏露三国協商体制と独逸伊三国同盟とに分かれており、これら列強は植民地の獲得によって自国の利をはかるといふ帝国主義的拡張競争の途上にあり、バルカンをめぐっての利害関係から、1914年、第一次世界大戦が勃発した。ヨーロッパ間の大量殺戮の戦争として、潜水艦や毒ガス兵器も本大戦で開発された。この14年にドイツ工作連盟(DWB)の展覧会がケルンで開かれ、W・グロピウスがデザインした工場モデル、B・タウトの《ガラスの家》、ウィーン・セセッションのJ・ホフマンらのデザインが展示されたが、その「規格化」か「芸術」か、の指標については、DWBの出自に関わるものとはいえ、諸傾向が混在していた。

ところで1900年前後の画家、例えばV・ファン・ゴッホ、E・ムンク、P・ゴーガン、G・クリムト、そしてG・デ・キリコたちは、近代都市に登場した「群集」の集団的社会意識に対抗するように、主観的な想像力＝個性を死守する意識があり、彼らは時代に先行したがために、その画面には不安と畏れが入り交じっている。その結節点は後期印象派から表現主義にいたる流れにあるが、その基点には画家各人の「靈視」の力に頼った「芸術」と「日常」の関係回復の努力があったし、その賭金としての「空虚感」が内在していた。その緩慢な努力に対し、急速かつ徹底的な切断を提唱したのは未来派だと言っている。

1914年の「未来派建築宣言」でA・サンテリアは、伝統的な重々しい感覚を切り離すために「軽く、実用的で、移ろいやすく、敏速な嗜好感覚」を言挙げしている。そのいささか抽象的な主張の受け皿は、新しい感性と精神状態を形成する「メトロポリス」像であった。このメガ・ストラクチャーを中心とする未来SF的ユートピア指向は、は

るか後の1960年代に現実化することにおいて、現代建築の系譜のルーツとなっていた。サンテリアほかイタリア未来派の建築家が描いたスケッチ・プランは、今日、すべて実現されてしまっている。このように、印象派を起点とする20世紀の「前衛芸術」の運動一般が、旧来からの大芸術の制度を打ち破り、「芸術」と「日常」の関係を回復していく企図をもっていたとすれば、未来派は、立体派や表現主義のもっていたドメスティックな空間の限界を凌ぐ構想を秘めていた。

一方1916年、表現主義者から立体派・未来派の開拓者たちまでが集まったチューリッヒのキャバレー・ヴォルテールでの集団実験は、ほどなく「ダダイズム」と名付けられるのだが、彼らは、詩や文学、音楽も含めた「日常的関心の彼方にある実験の演劇」（フーゴ・バル）を渴望していた。詩と絵画、音楽の結合によって、これまでの「日常」生活を批判し、新たな芸術と日常との結合を欲していた。1915年の「未来派総合演劇宣言」にもみられるように、各ジャンルの同時発生性を受けとめる空間＝場に価値をもたせ、そこでの意味の説明は不要であって、しばしば寄席芸的な即興性をも正当化するものだった。

この同時代性は、ロシア革命（1917）直前の、ロシア構成主義の画家E・リシツキーやM・ラリオーノフたちもそうであった。K・マレーヴィチは1915年の著書のなかで、自分の作業を、「形態のゼロのなかで変身して、アカデミックな芸術の掃き溜めから抜け出し、その新たな絵画の形態のリアリティは、まさに無から生じた形態による構築性を明かしている」と書いたように、描く具体的な対象性を放棄して、まったく「無対象」の絵画に到達していた。ここには、機械的でアクロバティックな絵画思考の飛躍がみてとれる。

また1917年、オランダのエトレヒトから立ち上がった「デ・ステイル」グループの初期メンバーの一人だったP・モンドリアンは、都市と自然の存在を等価と見做し、芸術のための「芸術美」ではなく「生活美」を追求する意図の下に、水平線と垂直線による幾何的抽象画へと歩みだしていく。

「第一機械時代」と呼ばれた20世紀初頭の四半世紀は、19世紀の蒸気エンジンに象徴される熱エネルギーから、電気を家庭に送るエンジン動力に象徴される、人間のスケールにあった小型で簡単に操作できる機械に変わり、日常生活に浸透していった。その技術革新は、第一次大戦で広く使われた機関銃の発明(B・ホッチキスの考案)に具現化され、そのスピン・オフが家庭用品として出回っていく。戦争は機関銃によって、それまでの肉薄する接近戦から大量殺戮戦に転換し、その対抗手段として塹壕戦がみだされる。また戦車が開発された。英軍が戦車を実戦に初めて登場させたのは1916年のことだった。

ドイツ表現主義の中心メンバー、A・マッケとF・マルクは本大戦で戦死し、表現主義は潰えた。1915年6月、マルセル・デュシャンはフランスからアメリカ行きの「ロシャンボー丸」に乗り込み、ニューヨーク前衛派に熱狂的に受け容れられ、17年のアンデバンダン展にレディメイド作品《泉》を出品したが、委員会から陳列を拒否された。

[Photo Credit]

22—©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2000